

眷属の夜

【一】

「ピー助、来い！ 来い、ピー助！」

カズオがいく度呼んでも、ピー助は素知らぬ顔で横になったまま動かない。窓から差し込む陽ざしの中で、ピー助の薄い茶色の縞模様がオレンジ色に輝いて見える。カズオが毛糸に鈴をつけたおもちゃを鳴らしても、一瞬チラと視線を投げただけで、けだるそうに目を細めた。

「ピー助ってどなた？ あんた誰？」と思っているようだ。もっともピー助ははじめからピー助だったわけではない。ずっと前から家にはいて、みんな勝手に「にゃんこ」だの「みゃー」だのと呼んでいた。

「猫の名前、今日からピー助だからね」

そう宣言したのは、今は東京で働いているカズオの姉ちゃんだった。人気のグループサウンズのドラマーの名前にちなんだらしい。その物言いがあまりにきっぱりしていたものだから、そのときからピー助はピー助になったのだった。だからピー助が自分をピー助だと認めていないとしても、それはそれで仕方がないのだ。

カズオはちょっと小さく舌打ちをして、鈴のおもちゃを放り投げた。

「あーあ、猫なんてつまんねなあ。 犬、飼いっちなあ」

カズオの仲良しのヨシオの家では犬を飼っている。犬の名はポチといった。ポチは、「ポチ来い」と言えば飛んでくるし、「お手」やら「待て」やら「伏せ」やら、ヨシオが何か命令をすると、ちゃんとそれに従うのだ。まるでヨシオの忠実な子分のような。カズオは、それがうらやましくってしょうがない。「また新しいことができるようになった」とヨシオが得意がっているから、学校の帰りに見に行くと、ヨシオが「おまわり」と指示するたびに、ポチはくるくると回った。

ポチは賢いだけでない。革命的な存在でもあった。村には昔から犬を飼ってはいけないという言い伝えがあるのだ。鎮守のお稲荷さまが犬を嫌うからというのがその理由らしかったが、ヨシオの父ちゃんが、「人が月にいく時代にナンセンス」といって、その古臭い迷信を打ち破ったのだ。

初めの頃は、何か良くないことが起こるんじゃないかと、村のみんなは少しはらはらしながら見ていたようだが、何事もないので、それからは犬を飼う家が増えてきた。カズオもことあるごとに犬を飼いたいとねだるのだが、まともに取り合ってはもらえない。

「犬、飼ってもいいべ、なあ」

家の前の用水路で大根を洗っている母ちゃんの背中を見下ろしながら、カズオは今日も犬をねだっていた。母ちゃんの丸い背中は岩のように黙り、振り向きもしない。こんなときは何を言ってもだめなことをカズオは知っていたが、少し意地になり、今度は母ちゃんの横に座りこんで肩をゆすった。

「なあってば、なあ。なんでおらうちはだめなんだよ。ケイコのところもカズヒロのところも飼ってんぞ。エミコの家でも今度子犬もらってくるってよ。なあってば」

「犬はだめだ。ばあちゃんも父ちゃんもだめだっていったべ」

「だから、なんでだよ」

「だめなもんはだめだ。ばあちゃんさ聞いてみろ」

いつもこれだ。母ちゃんはばあちゃんに聞けという。ばあちゃんは父ちゃんに聞けという。父ちゃんは母ちゃんに聞けという。結局、誰に聞いても、ちゃんとした理由もなしにだめなものはだめなのだ。

ある夜のことだった。カズオは小便がしたくて目が覚めた。カズオの家の便所は外にあるから、夜中はなるべく行きたくはない。今どき外便所なんて時代遅れもいいとこだと、カズオはそれも気に入らない。それに正直にいうと、5年生になっても夜中の便所はやっぱり少しおっかないのだ。だから、たいがいそのまま寝てしまうのだが、その夜はどうしても我慢できそうになく、カズオはしぶしぶ布団を抜け出した。

満月に近い月明かりが夜の闇をぼんやり照らす中、用をすますと、勝手口から人が出てくる気配があった。てっきり家族の誰かが便所に起きたのかと思っていると、足音は便所とは逆の方向に向かうようだ。様子をうかがうと、どうやらばあちゃんがどこかへ出かけるところらしい。

「こんな夜中に、ばあちゃんどこさ行く？」

不思議に思って、カズオはなんとなく後を追った。ばあちゃんがおかしくなったんじゃないかと、少し心配にもなったのだ。

しかし、ばあちゃんの足取りはしっかりしていたし、その後ろ姿は、はっきりとした目的があるようにも見えた。そして、ばあちゃんは驚くほど足が速かった。いつの間にか曲がった腰がぴんと伸びて、飛ぶように歩いた。追いつくどころか見失わないのがやっとなほどだ。

お稲荷さまの鳥居の前になると、ばあちゃんはようやく足を止めた。履物を脱いで裸足になると、二十段ほどの階段を一気にかけ登った。かけ登りながら、ばあちゃんの二本の腕と二本の脚は、白い毛でおおわれた四本の脚になっていく。そして、そのままお稲荷さまの祠の中へ飛び込んだ。

「ばあちゃん！」カズオは思わず叫んでいた。

続く